

嵯峨本とその前史の一相貌

KOAKIMOTO, Dan / 小秋元, 段

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

82

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

2021-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024065>

嵯峨本とその前史の一相貌

小秋元 段

一 はじめに

近世初頭、京都嵯峨の地で角倉素庵の主導で開版された一群の美装本を嵯峨本と呼ぶ。川瀬一馬氏は、嵯峨本をつぎのように定義した。

- ・ 光悦が自ら版下を書き、其の装潢に美術的の意匠を施したもの
- ・ 光悦の書風・装潢等の影響を頗る豊富に具備する刻書

そして、これに該当するものとして、以下の国書刊本をあげている。^①

- 伊勢物語（十種）、伊勢物語聞書（肖聞抄）（二種）、源氏小鏡（一種）、方丈記（二種）、撰集抄（一種）、徒然草（五種）、観世流謡本（九種）、久世舞三十曲本（一種）、久世舞三十六曲本（二種）、*新古今和歌集月詠歌卷（一種）、百人一首（二種）、*三十六歌仙（二種）、*二十四孝（一種） *を付したものは整版

近年の研究では、嵯峨本への光悦の関与は疑問視されている。^② その定義に光悦の名をあげることの問題は暫く措くとしても、川瀬氏の定義が書風と装訂に重きを置いている点には注意を払いたい。あくまでもそれは書物の形態上の特徴にもとづく定義となっているため、素庵の出版活動全体をとらえるには、右の諸書に加え、これと関連深い刊本群をも視野に入れる必要がある。素庵の刊行と考えられる古活字第一種本（嵯峨本）『史記』の表紙裏張にも用いられた慶長古活字中本謡本や舞の本「八島」「満仲」「伏見常盤」、活字書体が個性的で素庵の筆跡を思わせる下村本『平家物語』、そして、嵯峨本『方丈記』に先行して素庵が刊行したことが明らかな十行古活字本『方丈記』^③などの存在は忘れるわけにはゆかない。これらは美術的な装訂こそもないが、いずれも嵯峨本と同じ工房で刊行されたことが強く推測される古活字版である。

嵯峨本の諸書の刊行時期については、不明な点が多い。僅かに『伊勢物語』が慶長十三・十四・十五年（一六〇八・〇九・一〇）、『伊勢物語聞書』が慶長十四年の刊語をもつほか、「観世流謡本」が慶長十年（一六〇五）まで溯れることを表章氏が指摘し、^④『方丈記』が巻末の識語よ

り慶長十五年七月以前の刊行であることが知られる程度である。恐らく、嵯峨本の刊行は慶長十年代前半に集中するものと思われる。一方、筆者は『史記』の書誌的考察を進める過程で、『徒然草』のほか、慶長古活字中本謡本と舞の本が慶長八年（一六〇三）十一月以前の刊行であることを指摘した⁵⁾。これらに加え、下村本『平家物語』と十行本『方丈記』も、嵯峨本に先だって刊行された、嵯峨本前史を形成する書物群であると、筆者は考えている。素庵の出版活動を論じる場合、これら前史にあたる諸書をも顧慮しながら、調査・考察をする必要がある。そのことにより、嵯峨における出版活動の全体像が見えてくるからだ。

本稿では、嵯峨本とその前史を形成する諸書のなかに、共通するレイアウト意識をもった一群の書があることを指摘する。そして、それらの

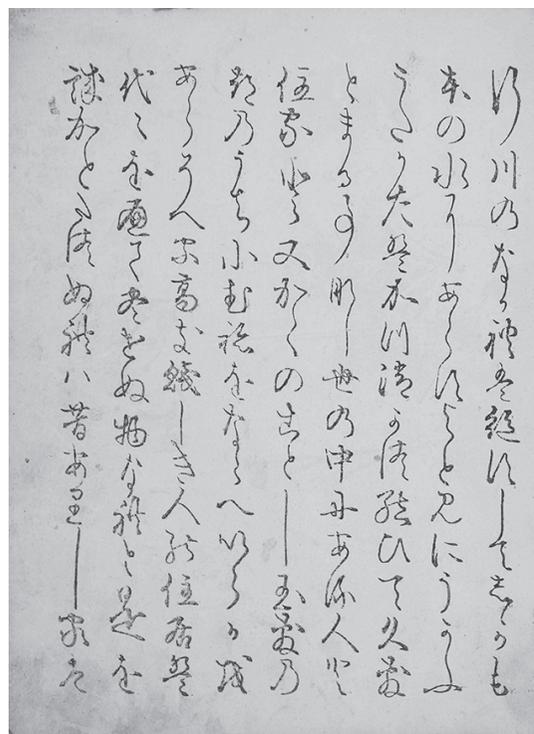


図1 嵯峨本『方丈記』1才 (国文学研究資料館蔵)

書の緊密な関係性とその意味するところを論じてゆきたい。

二 組版における「行」意識」の存在

はじめに嵯峨本『方丈記』第二丁オを図1として掲げる。ここで注目したいのは行末から行頭へ本文が移行する部分である。これを翻字すればつぎのようになる。

- (第一行／第二行) ……しかも／本の……
- (第二行／第三行) ……うかふ／うたかたは……
- (第三行／第四行) ……久敷／とまる……
- (第四行／第五行) ……人と／住家と……
- (第五行／第六行) ……玉敷の／都の……
- (第六行／第七行) ……いらかを／あらそへる……
- (第七行／第八行) ……住居は／代々を……
- (第八行／第九行) ……是を／誠かと……
- (第九行) ……家は……

一見して明らかのように、語が行を跨ぐことがない。しかも、ここでは今日いう文節が行を跨ぐことがないのである。以下の丁では、自立語と付属語の間、複合動詞の形態素間などで行を跨ぐ箇所が僅かな数だけ例外的にあるのだが、全体に文節単位を意識した、注意深い割り付けが行われている。

同様に、嵯峨本『徒然草』第一種本第二丁オについても確認しよう(図2)。

- (第一行/第二行) ……す、りに/むかひて……
- (第二行/第三行) ……ことを/そこはかと……
- (第三行/第四行) ……あやしうこそ/物くるおしけれ……
- (第四行/第五行) ……生れては/ねかはしかるへき……
- (第五行/第六行) ……おほかめれ/みかとの……
- (第六行/第七行) ……園生の/すゑ葉まで……
- (第七行/第八行) ……やんことなき/一の人の……
- (第八行/第九行) ……た、人も/とねりなと……
- (第九行/第十行) ……みゆ/その子……
- (第十行) ……はふれにたれと」

ここでも文節が行を跨ぐことがない。以下の丁でもやむなく自立語と付属語の間、複合語の形態素間で改行する箇所も僅かにはあるのだが、全体に文節を単位に行末を収める傾向が極めて強いと見うけられる。

ちなみに、川瀬一馬氏は嵯峨本の『徒然草』を五種に分ち、雲母刷文様の料紙をもつ本を第一種本・第二種本に分類した⁶⁾。だが、両者は上巻の第一丁のみ別版で、第二丁以降同版であることが知られている⁷⁾。このようなことが起こった事情は、第二種本の第一丁の各行行末を見ればわかる(図3)。第三行から第四行にかけてが「あやしう/こそ」、第四行から第五行にかけてが「生まれ/ては」、第五行から第六行にか

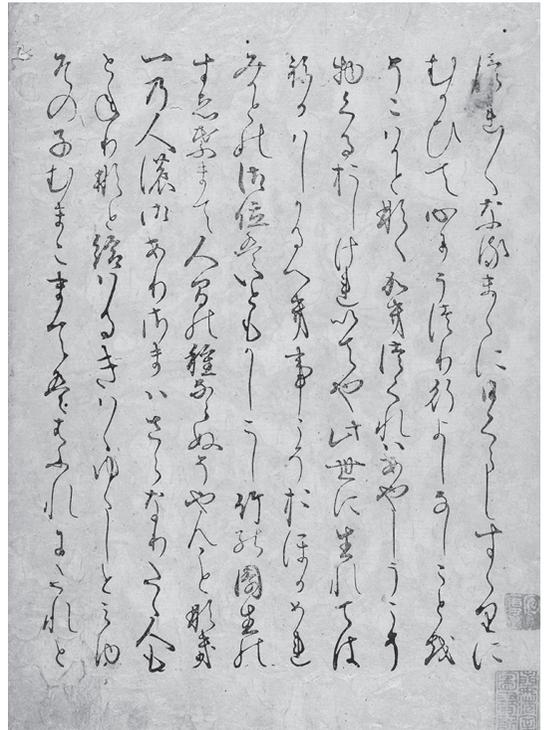


図2 嵯峨本第一種本『徒然草』(公益財団法人東洋文庫蔵)

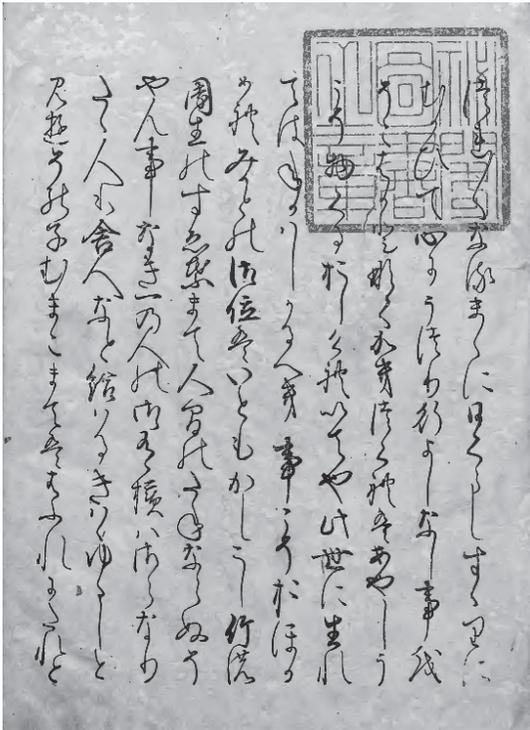


図3 嵯峨本第二種本『徒然草』(国立公文書館内閣文庫蔵)

けてが「おほか／めれ」と、三行つづけて文節が行を跨いでいる。この状態を望ましくないと考え、第一種本のごとく版を改めることにしたのだろう。それゆえ、上巻第一丁のみ版を異にする本が残ったのだ。今日、第二種本は第一種本と同種とされて欠番扱いだが、実際には「第二種本」の第一丁だけは、第一種本のものに先行するのである。

各行の行末を一定の言語単位で収め、それが行を跨がないように配慮する。これは今野真二氏のいう「行」意識⁹⁾の現れにほかならない。こうした意識をもって活字の割り付けを行った古活字本に、嵯峨本では「方丈記」「徒然草」「観世流謡本」が、嵯峨本以外では十行本「方丈記」、下村本「平家物語」があげられる。そもそも写本でも刊本でも、一定の言語単位を行内に収める配慮は、必ずしも厳密になされるものではなかった。無論、伸縮自在な仮名文字の特性を生かし、余白の大きさに応じて一定の言語単位を行末に詰めこむことはあったが、一方で単語の途中や自立語と付属語の間で行を跨ぐこともしばしばあることであった。特に写本の場合、書写の一回性を考えればそうなるのは自然で、逆に言語単位が行を跨がないように本文を書写することは、下書きを作成しなにかぎり、書写者に大きなストレスを与えたはずだ。その点、刊本の場合、版を作る段階で割り付けを自在に調整することが可能であったから、思いどおりの版面を比較的容易に表出できる余地があった。

しかし、例えば、慶長四年跋刊『延寿撮要』、同『無言抄』、嵯峨本・伝嵯峨本に先行する『徒然草』、『源氏物語』、慶長古活字中本謡本、舞の本、慶長九年刊『徒然草寿命院抄』、慶長十一年刊『吾妻鏡』、慶長十四年刊『太平記』など、この時期に刊行された漢字平仮名交じり〔寿命

院抄』と『吾妻鏡』はその一部に漢字平仮名交じりの部分をもつ)の古活字版の殆どで、こうした配慮は徹底されていない。その後の古活字版でも同様である。それは言語単位が行を跨がず組版することに、相応の負荷がかかったからだと推察される。特に古活字版の場合、一行の文字数が一行に布置できる活字の数に制約されていたわけだから、その調整には整版本以上に困難が伴ったはずだ。ただ、そこにはたとえ言語単位が行を跨いだとしても、それは可読性を著しく損なうものとは見なされていないかつたという事情もあったのだろう。それゆえ、言語単位を行内に収めることは、割り付け上、最優先される要件ではなかつたといえるのである。

だとすると、嵯峨本『方丈記』『徒然草』『観世流謡本』、十行本『方丈記』、下村本『平家物語』の五書は、日本の書記史上、注目すべき刊本群だとはいえないか。特に、このことは平仮名という日本語固有の文字が本格的に印刷に登用される時期に際会した古活字版草創期の人々が、仮名をどう版面に表現するか模索した跡を示すものである。なお、キリシタン版の後期国字本が同様の版式をもっていることはすでに指摘されている¹⁰⁾。それとの差異と関係性については後に触れたい。

三 各行割り付けの基本的な方法

右にあげた五書は、どのような方法で文節が行を跨がない割り付けを行い得たのであろうか。その最大の方法は、単純なことだが、漢字と平仮名の使い分けによる字数調整であった。

具体例を、嵯峨本「観世流謡本」のうち上製本と、観世黒雪節付本（大原御幸）を対照させるかたちで見てゆきたい。観世黒雪節付本（大原御幸）は国立能楽堂の所蔵で、嵯峨本と同様の雲母刷文様の施された色替わり料紙をもち、そこに素庵と推定される筆跡で本文が書写されている。¹¹ 上製本の底本とまではいえなからうが、嵯峨本に連なる環境で制作された写本である。両者を比較すれば、本文を書写する場合と、開版する場合との、表記の差が確認できるだろう。なお、嵯峨本「観世流謡本」は七行十三格、黒雪節付本も七行である。

以下に冒頭の半葉を引く。改行は嵯峨本に従い、黒雪本の改行箇所は／で示した。

（黒雪本） 抑是は後白河院につかへたて／まつる

（嵯峨本） これは後白河院につかへ奉る

（黒雪本） 臣下也扱も此度先帝／二位殿を

（嵯峨本） 臣下也扱も此度先帝二位殿を

（黒雪本） はしめ奉り平家の／一門九州長門の国

（嵯峨本） 始奉り平家の一門九州長門国

（黒雪本） はやともの／浦にしてことくくはて

（嵯峨本） はやとものうらにして悉はて

（黒雪本） 給ひて候／女院も御身をなげさせ

（嵯峨本） 給ひて候女院も御身を投させ

（黒雪本） 給ひ／候をとり上給りかひなき御命

（嵯峨本） 給候を取上奉りかひなき御命

（黒雪本） たすかりおはしまし候參川守
（嵯峨本） たすかりおはしまし候三河守

両者の本文で、漢字・仮名表記に違いのある箇所傍線を施した。同一の本文でありながら（黒雪本の冒頭に「抑」があるのは、異同といえるが）、漢字・仮名表記に少なからぬ違いがあることがわかるだろう。そして、嵯峨本では文節が行を跨がない一方で、黒雪本では「たて／まつる」（一～二行目）、「御」命（七行目～ウ一行目）の例が見られる。つまり、嵯峨本では十三格のなかで、行末の最後の文字が文節の切れ目となるよう、漢字表記のところを仮名に開く、仮名表記のところを漢字に閉じるという両方の操作を行い、字数調整を図っているのである。もう一つ、嵯峨本『方丈記』の例を見ておくこととする。約六十箇所
に校訂がなされてはいるものの、嵯峨本は十行本を底本としている。十行本と対比させることにより、嵯峨本が同様の方法で字数調整を行っていることがより明白になるだろう。

（十行本） 行河のなかれは絶すしてしかも

（嵯峨本） 行川のなかれは絶すしてしかも

（十行本） もとの／水にあらすよとみにうかふ

（嵯峨本） 本の水にあらすよとみにうかふ

（十行本） うたかたは／かつ消かつ結ひて久しく

（嵯峨本） うたかたはかつ消かつ結ひて久敷

（十行本） とまる事なし／世中にある人と

〔嵯峨本〕とまる事なし世の中にある人と

〔十行本〕 栖と又かくのこし／玉しきの

〔嵯峨本〕 住家と又かくのこし玉敷の

〔十行本〕 都のうちに棟をならへ薨を／

〔嵯峨本〕 都のうちにむねをならへいらかを

〔十行本〕 あらそへるたかきいやしき人の住居は／

〔嵯峨本〕 あらそへる高き賤しき人の住居は

〔十行本〕 代々を経て尽せぬものなれと是を

〔嵯峨本〕 代々をへて尽せぬ物なれと是を

〔十行本〕 誠かと／たつぬれはむかしありし家も

〔嵯峨本〕 誠かとたつぬれは昔ありし家は

十行本は一行十七格で、これも先述のとおり、文節が行を跨がない配慮を徹底している。嵯峨本は一行十五格で、一行に詰められる活字の齣数が変わるので、文節が行を跨がないようにするためには、文字数の調整が相応に必要であった。そのため、嵯峨本は傍線部のように漢字・仮名表記を変更している。ただし、嵯峨本では二行目の「に〔耳〕」、四行目の「事」、五行目の「と〔登〕」「し」、八行目の「是」、九行目の「し」が二倍格となっている。「是」は一・五倍格活字に半格分込め物を充てる。後述)。かかる倍格活字も字数調整に一役買っただけだが、これらは自然な筆跡を表現するための意匠としての役割を主に担うものであった。例えば、五行目では、「と〔登〕」「し」で二倍格活字が用いられているが、そのどちらかは、「住家」を「すみか」に、あるいは、「玉

敷」を「玉しき」か「たま敷」に仮名表記すれば、全格活字を用いてもよかつたのである。つまり、倍格活字には意匠上の役割の方が重視され、最終的な字数調整は漢字・仮名の使い分けで図られていたのだ。

およそ、以上のような手法を基本に、嵯峨本『方丈記』『徒然草』『観世流語本』、十行本『方丈記』、下村本『平家物語』では、文節が行を跨がない割り付けが実現されていた。だが、それだけですべてが滞りなく対応できるものではなかった。他にとられた手法を以下、見てゆくこととしよう。

四 「圧縮型活字」の使用

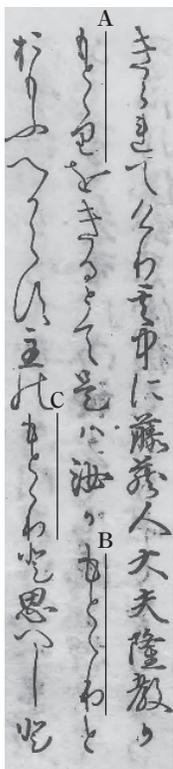
平仮名古活字本の特徴は、連綿体を生かすために二字以上の連彫活字が多用される点にある。平仮名表記という日本語固有の書記形態を活字化しようとするれば、こうした活字の製作は必然的に想起されたものと思われる¹²⁾。鈴木広光氏の調査によれば、嵯峨本『伊勢物語』（慶長十三年刊初刊本）で使用された活字は総計二一三一種であり、このうち全格が九三一種、二倍格が一〇三〇種、三倍格が一六一種、四倍格が八種、規格外が一種とのことで、二倍格が全格を上回っているのである¹³⁾。

倍格活字においては、二倍格活字に二字、三倍格に三字の文字列を刻することもあれば、「し」に〔耳〕「事」など、縦長の一文字を二倍格以上で刻することもあった。また、「して」「とし」「まし」など、二文字を三倍格で刻することもあった。これらの活字が一行の字数調整に機能することもあったが、前述のように、これらはそれを目的に製作され

たというよりも、書写体を思わせる自然な文字表現を追求するなかで考案された側面が強い。

ここで注目したいのが、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』で用いられている、字数に対して格数の少ない活字の存在である。例として、下村本『平家物語』をとりあげる。巻一、四十九丁オの五〜六行目には三種の「もと、り」という活字が用いられている(図4)。Bが四字四倍格であるのに対して、A・Cは四字三倍格である。これが字数に対して格数の少ない活字で、以下、これを文字が格数に対して圧縮されているとの意で、「圧縮型活字」と呼ぶ。このうち、嵯峨本『徒然草』をめぐっては、鈴木氏が四字連続活字の多用と四倍格五字連続活字の使用を指摘し、そこには「連続を中心に写本の書記様式を再現しようとした方法」があると論じている¹⁴⁾。また、森上修氏も、嵯峨本『徒然草』が三倍格活字(一〇五九種)・四倍格活字(一七六種)を多用することから、印字面における横列が揃わず、『伊勢物語』に比べてはるかに整版に近い印面を形成していると指摘している¹⁵⁾。このように、長倍格の連続活字を頻用することで、より活字的ではない文字表現を志向する点に、嵯峨本『徒然草』の特徴があることが知られているの

図4 下村本『平家物語』巻一・49オ
(国立公文書館内閣文庫蔵、特二二五)



だが、その特徴はこの圧縮型活字の多様によっても強化されているといえる。

十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』における圧縮型活字の使用状況は表1のとおりである。数値は活字の種類数である。なお、「く」は一律二字として扱った。これによれば、『徒然草』がバリエーションに最も富んでおり、五倍格七字連彫(「かはるまこと」)下巻十六丁ウ十行目)から全格二字連彫まで、八パターンが存在する。活字の種類数が最も多いのは四三〇種の二倍格三字連彫で、これに一七八種の三倍格四字連彫がつづく¹⁶⁾。十行本『方丈記』では四倍格六字連彫(「捨」かたきよすか)十四丁ウ五行目、ほか)から全格二字連彫までの六パターン、下村本『平家物語』では五倍格六字連彫(「申されければ」巻一、六十三丁オ四行目、ほか)から全格二字連彫までの五パターンが存在

表1 圧縮型活字の数

	十行本 『方丈記』	嵯峨本 『徒然草』	下村本 『平家物語』 巻一・二	嵯峨本 『伊勢物語』
5倍格7字連彫		1		
5倍格6字連彫		2	3	
4倍格6字連彫	4	1		
4倍格5字連彫	5	27	25	
3倍格5字連彫	1	2		
3倍格4字連彫	54	178	152	1
2倍格3字連彫	97	430	256	65
全格2字連彫	4	30	26	

する。二倍格三字連彫、三倍格四字連彫の順で種類数が多いのは『徒然草』と同様だ。ただし、『平家物語』で四倍格六字連彫、三倍格五字連彫といった過度に文字を圧縮した活字がないのは、一つの特徴といえるだろう。なお、『平家物語』については分量が多いため、『徒然草』と丁数がほぼ釣り合う巻一・二を調査対象とした（『徒然草』一七二丁。『平家物語』一六七丁、ただし目録を除く）。

字間を詰めた連綿活字の活用は、連彫活字であっても一字一格分を基本サイズとして印出される版面にアクセントを付けるうえで有効で、表現に自然な変化をもたらす機能を果たしたはずだ。だが、古活字版全体を見たとき、圧縮型活字があまり用いられないのは、そうした効用が重視されなかったからだろう。嵯峨本『伊勢物語』では二倍格三字連彫活字が六十五種存在するが、これらは一行十八格組みの『伊勢物語』で、和歌を二字下げで組むにあたり、上句を一行に収めるための調整用に使用されたものであることが、鈴木氏により指摘されている¹⁷⁾。つまり、嵯峨本『伊勢物語』での圧縮型活字は、限定的にしか使用されていないのである。

そのように考えると、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』での圧縮型活字の使用も、意匠上の効果を主眼としたものでは必ずしもなかったといえるかもしれない。例えば、『方丈記』のつぎの印面を見てみよう（図5）。ここでは傍線を施した八種の圧縮型活字が用いられている。自然な筆写体を表現するのに効果をあげているものも少なくないが、三行目の「及はず」、六行目の「さるか」、七行目の「おほひ」などは、字間が詰まりすぎて前後左右との調和を乱している

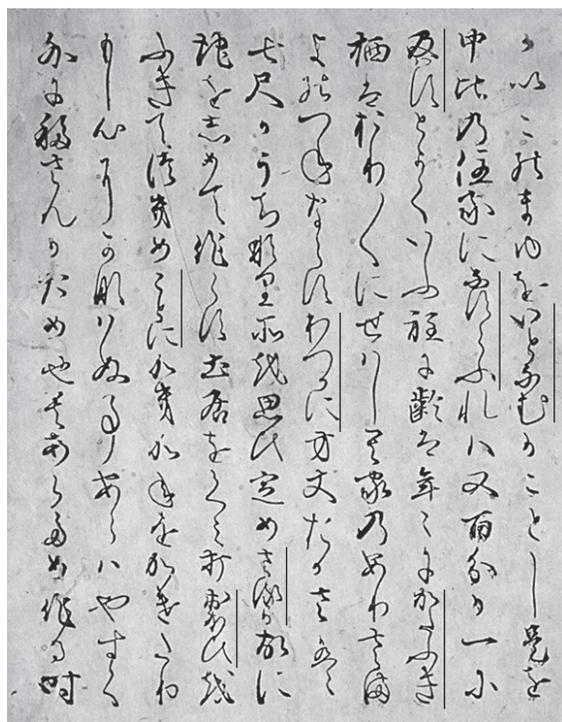


図5 十行本『方丈記』15才（京都大学附属図書館蔵）

と見ることもできる。嵯峨本『伊勢物語』の二倍格三字連彫活字について、鈴木氏は「連続する文字列が詰め込まれているだけで、書写された連綿仮名の持つ伸びやかさはほとんど表現されていない」と評している¹⁸⁾が、これらはその評に通じるものがあるだろう。このように、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』における圧縮型活字は、仮名表現の面からは成功と失敗の両方が指摘できる。だが、これらの使用のもとで、各行の行末が文節単位で収められていることを考えると、圧縮型活字の使用の本意は字数調整の面にこそあったといえるのではなからうか。

五十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、 下村本『平家物語』の関係

つづいて、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』における圧縮型活字の使用の詳細を検討したいが、その前に本節では、これら三書の関係性を考察する。

嵯峨本『伊勢物語』の活字のおおらかさとは異なるが、三書で用いられている活字は個性的な書風を醸している。仮名でありながら筆画を強調する点、漢字を側筆を思わせる太線で表現し(図1、四行目の「生」参照)、連綿部を細線で表現する点(図1、一行目の「日くらし」参照)は、肥瘦を強調する角倉素庵の書風である。平仮名「あ」の第二画を一本の斜線で表現する(図1、三行目参照)のも素庵の好みだ。こうした特徴がこれら三書には共通しており、同一の活字が用いられていることは疑いない^⑩(無論、それぞれの書で新規の活字も投入されているが)。

そのすべてを検証するにはいたっていないが、圧縮型活字に限っていえば、表2に示したものが三書共通で用いられていることが確認できる。嵯峨本『徒然草』のみならず、十行本『方丈記』、下村本『平家物語』も嵯峨の印刷工房で刊行されたことが、この点からも裏づけられる。

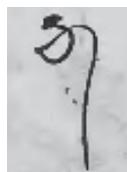
それでは三書の先後関係はどのようになるだろうか。まず、下村本『平家物語』は三書のなかで最も刊行が遅れるものと思われる。『平家物語』は十二冊から成る大部の書で、巻一では精妙な文字が印出されているが、巻十二にいたると活字の摩滅が進行し、その精妙さに見る影はな

表2 十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』における共通の圧縮型活字

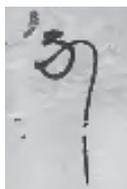
活字	印字箇所(複数ある場合は各書の初出)
あかり	方丈記3ウ、徒然草上61ウ、平家物語巻一58オ
あらず	方丈記14ウ、徒然草上14ウ、平家物語巻一35オ
いとなみ	方丈記3オ、徒然草上22オ、平家物語巻一55オ
かなしa	方丈記10オ、徒然草上21ウ、平家物語巻一36オ
かなしb	方丈記11ウ、徒然草上20オ、平家物語巻一34ウ
ければ	方丈記17ウ、徒然草上8オ、平家物語巻一5オ
ことはり	方丈記11ウ、徒然草下9ウ、平家物語巻一38ウ
されは	方丈記23オ、徒然草上20オ、平家物語巻二76オ
しらす	方丈記3オ、徒然草上68オ、平家物語巻一46ウ
すへて	方丈記3オ、徒然草上87ウ、平家物語巻二10オ
ならずa	方丈記6オ、徒然草下24オ、平家物語巻一16ウ
ならずb	方丈記17ウ、徒然草上7ウ、平家物語巻一28オ
ならひ	方丈記7ウ、徒然草上21ウ、平家物語巻二57ウ
まつり	方丈記18ウ、徒然草下71オ、平家物語巻一77ウ
よりも	方丈記21オ、徒然草上65オ、平家物語巻一65オ
をのつから	方丈記5ウ、徒然草上77ウ、平家物語巻一16オ

い。そのような活字が十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』に襲用されるとは考えがたい。ただし、下村本『平家物語』の印刷の過程では、順次、新彫活字も投入されている。こうした活字のみ選り分け、『方丈記』『徒然草』の開版時に提供されたことも考えられなくはないが、そのような複雑な作業がなされたかは疑問だ。

実は、下村本『平家物語』と嵯峨本『徒然草』の二書の先後関係は、活字の欠損状態をたどることによって明らかにすることができる(図6・7)。「徒然草」上巻八丁オ八行目に現れる「なし」は、その後、十



『徒然草』上・8オ



『徒然草』上・18ウ

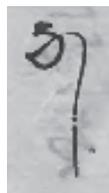


図6 『平家物語』 卷一・25ウ



『徒然草』上・59ウ



『徒然草』下・32ウ

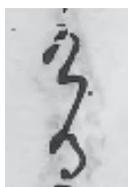


図7 『平家物語』 卷一・7オ

(いずれも国立公文書館内閣文庫蔵)

に、『徒然草』上巻五十九丁ウ六行目に現れる「ける」は、六十八丁オ、六十九丁オ、七十二丁ウ、七十三丁オ、八十六丁オ、九十二丁ウで欠損のない状態で使用され、下巻三十二丁ウ六行目で初めて欠損した状態で現れる。以下、四十六丁オ、四十九丁オ、五十九丁オ、六十一丁オで同様の状態で襲用され、『平家物語』巻一・七丁オ十行目でもそのままの状態での使用が認められる。『徒然草』から『平家物語』への順で刊行されたことは明白だろう。

ドウで襲用されるまで欠損がない状態である。だが、十八丁ウ十行目に現れた段階から、「し」のほぼ中央部に欠損が認められるようになる。以下、二十七丁オ、三十九丁オ、四十三丁ウ、五十七丁オ、六十七丁ウ、七十三丁オ、七十七丁ウ、八十四丁オ、下巻三十三丁ウ、四十二丁ウ、四十七丁ウ、五十丁ウ、五十六丁ウ、七十六丁ウで同様の状態で襲用され、『平家物語』巻一・二十五丁ウ四行目でも同様に使用が認められる。欠損が生じたのは『徒然草』上巻の途中であるから、印行としては『徒然草』が『平家物語』に先行するということはいままでもない。同様

一方、十行本『方丈記』と嵯峨本『徒然草』については、こうした決定的な証拠がないため、先後関係の判定は難しい。だが、『方丈記』から『徒然草』へという蓋然性が高そうである。それは、『方丈記』と『徒然草』で使用される同一文字列の圧縮型活字を見てゆくと、『方丈記』と同種の活字が『徒然草』で用いられながらも、後半にいたると新種の活字に置きかえられる事例が認められるからだ。表3のように、例えば、『方丈記』十七丁ウ六行目の「ければ」(a種)は、『徒然草』上巻八丁オから七十九丁オまで七箇所を用いられる。その途中、二十九丁ウで一丁につき二本の「ければ」の活字が必要となり、「ければ」(b種)が投入される。こちらは下巻にいたっても用いられ、下巻六十八丁オまで使用が認められる。ということは、「ければ」(a種)は「ければ」(b種)に先行して彫造されていたと見なされ、「ければ」(a種)の使用が認められ、(b種)が存在しない『方丈記』は、『徒然草』に先んじて印行されていたことがわかるのである。同様に、「なども」は『方丈記』で用いられた活字(a種)が『徒然草』上巻で襲用され、途中で(b種)が出現し、それが下巻でも用いられる例である。また、

「もとめ」も『方丈記』と『徒然草』上巻で（a種）が用いられ、下巻七十二丁ウで同一文字列の活字を二本必要としたことから、新種の（b種）が投入された例である。これらの事例を踏まえれば、『方丈記』のあとに『徒然草』が印行されたと思なされる。

以上のことから、圧縮型活字を使用する古活字版は、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』の順で刊行されたと考えられる。⁽²⁰⁾ 嵯峨本『徒然草』は慶長八年（一六〇三）以前に刊行されている。十行本『方丈記』と下村本『平家物語』はその前後に刊行されたと推測できるであろう。

六 三書における「圧縮型活字」の使用傾向

それでは、圧縮型活字を使用するこの三書において、これらの活字の使用状況はどう展開されているであろうか。表4をもとに考えてゆきたい。

まずは十行本『方丈記』である。圧縮型活字で印出された文字列の総数は一九二例（a）である。このうち、一回しか印出されない文字列は一二〇例（b）に及び、二回以上印出された文字列（同一活字によるものか否かを問わない）は七二例（c）にとどまる。総印出数に対して、一回しか印出されない文字列が圧倒的に多いことがわかるだろう。活字の種類数で見ると、総数一六五種（e）に対して、一回しか使用されない活字は一四五種（f）、二回以上使用された活字は僅か二〇種（g）である。あえて彫造されながらも、一度しか使用されない活字が一定数

表3 十行本『方丈記』と嵯峨本『徒然草』における同文字列複数種の圧縮型活字の使用分布 無印a種 * b種

ければ	【方丈記】	(16ウ)	17ウ	【徒然草上】	8オ	25ウ	27ウ	29ウ	29ウ*
	32オ	44オ*	46ウ	49オ*	50オ*	66オ*	78オ*	79オ	90ウ*
	【徒然草下】	12ウ*	20ウ*	51ウ*	52ウ*	54オ*	68オ*	（『方丈記』16ウは17ウとは別種）	
なども	【方丈記】	9ウ	【徒然草上】	29ウ	93オ*	【徒然草下】	74オ*		
もとめ	【方丈記】	18ウ	【徒然草上】	84ウ	【徒然草下】	72ウ	72ウ*	76ウ*	

表4 『方丈記』『徒然草』『平家物語』における圧縮型活字の印出数と活字種類数

	印出文字列数				活字種類数			
	a. 総印出文字列数	b. 1回のみ印出 (b/a)	c. 2回以上印出 (c/a)	d. cのうち同一活字によるもの (d/c)	e. 総活字種類数	f. 1回のみ使用 (f/e)	g. 2回以上使用 (g/e)	h. gの平均使用回数 d/g
方丈記	192	120 (62.5%)	72 (37.5%)	47 (65.3%)	165	145 (87.9%)	20 (12.1%)	2.35回
徒然草	1322	364 (27.5%)	958 (72.5%)	894 (93.3%)	671	428 (63.8%)	243 (36.2%)	3.68回
平家物語 (巻一・二)	868	246 (28.3%)	622 (71.7%)	574 (92.3%)	462	294 (63.6%)	168 (36.4%)	3.42回

あるのは、古活字版の宿命である²¹。だが、『方丈記』の圧縮型活字におけるその比率、八七・九％(f/e)は相当高いといえないか。

十行本『方丈記』の圧縮型活字のうち、一回しか使用されないものの比率が高いのは、行末の字数調整が圧縮型活字に強く依存していたことを物語る。割り付けを進めるにあたり、行末の処理に苦しむ都度、圧縮型活字を配することで切り抜けていった。ここでは活字を効率的に使用することは、あまり意識されなかった²²。十行本『方丈記』のこの様相は、三書のうち、初期の試行の姿を示すものではあるまいか。

ただし、十行本『方丈記』における圧縮型活字使用の非効率さは、二十四丁という『方丈記』の丁数の少なさに起因するという見方もできるかもしれない。これがもし長篇の作品であれば、一度彫造された活字は重ねて配植される機会に恵まれたはずだと考えるのは、自然なことである。そこで三書における圧縮型活字の平均使用回数を一瞥する。『方丈記』では同一活字により二回以上印出された文字列(d)は、総計四七例である。これに対して、二回以上使用された活字(g)は二〇種だから、dをgで割ると、その平均使用回数は二・三五回(h)となる。一方、同様に計算すると、嵯峨本『徒然草』では三・六八回、下村本『平家物語』巻一・二では三・四二回となるから、ここには有意の差がある。だが、『方丈記』二十四丁、『徒然草』一七二丁、『平家物語』一六七丁という丁数の差を考えると、『方丈記』の活字襲用状況は決して劣るものとは思えない。『方丈記』では、繰り返し使用する活字に限って言えば、それなりに有効に活用されているともいえる。

問題は二回以上印字された文字列のうち、二回以上使用された活字に

よるものの比率にあるようだ。『方丈記』は七二例(c)のうち四七例(d)にとどまり、その比率は六五・三％となる。これに対して、『徒然草』では九五八例(c)中八九四例(d)で、その比率は九三・三％、『平家物語』でも六二二例(c)中五七四例(d)で、その比率は九二・三％にのぼる。つまり、『徒然草』『平家物語』では一度彫出した活字はおしなべて襲用される傾向がある一方で、『方丈記』では活字を襲用できる文字列が現れても、それを使わず、新たな活字を彫出する傾向が強かったといえるのだ。

こうした非効率性が解消されてゆくのが『徒然草』『平家物語』であることは、表4のデータからも容易に理解することができよう。二回以上印出された文字列(c)と一回のみ印出された文字列(b)の数が『方丈記』から逆転するのは、丁数が大幅に増えたことによると見ることができるといえる。だが、少なくとも、一度使用した活字で襲用可能な文字列が出てくれば概ねこれを使用し、活字使用の効率性を上げたのは、『徒然草』『平家物語』における進歩である。とはいっても、『徒然草』『平家物語』で圧縮型活字の使用の効率性が全体的に高まったと見るのは早計かもしれない。というのも、一回しか用いられない活字(f)が『徒然草』で四二八種、『平家物語』で二九四種も存在しているからだ。しかもその大半は、一回しか現れない新規の文字列(b)のものである。この点に注意すれば、両書でも『方丈記』と同様、各行で字数調整を行うにあたり、圧縮型活字の役割が依然大きく、必要になる都度、新規の文字列の活字が彫造されつづけたことがわかるのである。

七 嵯峨本『方丈記』における方法

ここまで圧縮型活字による字数調整の実状を見てきたが、嵯峨本「観世流謡本」や『方丈記』ではこの種の活字は殆ど用いられない。例えば、私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会書誌学研究会の調査によれば、特製本（浮舟）において圧縮型活字は「いかに」「はかな」の二種しか用いられていない。²³ 嵯峨本『方丈記』でも「とかや」（二丁ウ）、「廿九日」（四丁オ）の二種のみである。

嵯峨本『方丈記』の特徴として、森上修氏は分数格活字の使用をあげている。²⁴ 分数格活字とは全格に満たない、あるいは、整数倍格にはあたらないサイズの活字のことで、全格と整数倍格の活字をベタで組み、版を形成する古活字版では、あまり例を見ないものである。その分数格活字が、嵯峨本『方丈記』では $1/4$ 格から $9/4$ 格まで七種存在するという。第一丁ウ二〜三行目の例を示そう。

住人も是に同し所もかはらす人も

多かれと古みし人は三三十人中に

ここでは、二行目に $6/4$ 格（一・五倍格）の「し」（傍線部）と、 $3/4$ 格の「所」「か」（二重線部）が用いられている。「し」が全格より $2/4$ 格分長くなったところを、「所」と「か」で $1/4$ 格ずつ切り詰め、全体の帳尻を合わせている。嵯峨本『方丈記』では単字の「し（之）」は二倍格とされ、全格活字とはならない（全格となる「し」は「し（志）」のみ）。ここで二倍格の「し」を用いないのは、それを用いると、行末

が「人」で終わり、「も」が次行に送られてしまうからだ。そのため、「し」を二倍格よりやや短い $6/4$ 格に造り、その分「所」「か」を $3/4$ 格とすることで、「人も」という単位を行内に収めたのである。三行目も同様で、「中に」までを一行に収めるため、傍線部「は」「か」が $2/4$ 格とされたのだ。その結果、嵯峨本『方丈記』では一行十五格、つまり一行の字数が最大十五字であるところ、ここでは例外的に十六字、配されたのである。このような方法で十六〜十七字になる行として、他に十四丁オ三行目、十七丁ウ六行目、十九オ四行目、二十二オ二行目、二十八オ八行目があげられる。

このほか、森上氏は嵯峨本『方丈記』で字間詰め物が使用されていることも指摘する。それは $6/4$ 格の「是」などが使われたとき、余分となった $2/4$ 格分の空隙を埋めるものとして使用されている。つまり、込め物は分数格活字とセットで用いられているのである。森上氏は『方丈記』で分数格活字や字間詰め物が使われている理由を不明とするが、本稿での考察にしがえば、その使用が文節を行内に収めるところに起因することは明白だろう。森上氏は嵯峨本『方丈記』を「特異な活字組版の技法によって印出された前例を見ない稀有な平仮名交り（古活字版）」と評価する。勿論、それに間違いはないのだが、文節が行を跨がずに配植する方針をもつ同書にとつて、分数格活字や込め物の使用は、その模索のなかで自ずと想起された方法だったのだろう。

八 当該諸書の出版史上の意義

以上、嵯峨本『徒然草』『方丈記』『観世流謡本』と十行本『方丈記』、下村本『平家物語』の五書が、文節が行を跨がない配慮をもつことと、それを実現するためにとった方法について見てきた。その方法の基本は、表記を仮名に開き、漢字に閉じることにより、一行の文字数を自在に調整することにあつた。これはまさに漢字平仮名交じりという日本語表記の特性を最大限利用した方法だったといえる。その一方で、これら諸書の本文において漢字・仮名が「そのように」表記されているのは、一行に詰められる活字の数に大きく制約されていたからであることも銘記しておくべきだろう。

こうした割り付け上の配慮が川瀬氏のいう嵯峨本のみならず、十行本『方丈記』、下村本『平家物語』にも共有されていた。しかも、嵯峨本『徒然草』を含む三書では活字を共有するだけでなく、圧縮型活字を使用し、字数を調整するという手法も共有されていた。これもまた、伸縮自在な仮名文字の特性を生かした独特の創案と評せよう。なお、時系列的に考えると、これら三書は嵯峨本の前史を形成するので、こうした手法は前史の段階のみでとられ、慶長十年以降の刊行と思われる嵯峨本『観世流謡本』『方丈記』へは引き継がれなかった。また、文節が行を跨がないようにする配慮そのものは、他の嵯峨本へは継承されていない。それは偏に処理の煩雑さによるのだろう。

それにしても、これら一群の書はなぜこのような割り付け方法を堅持

するのか。文節が行を跨ぐことは写本において普通にあつたことだから、漢字平仮名交じりの書を読み慣れた人々に向けて、これはそれほど拘泥するべき要件ではなかったはずだ。

そうしたなか、これらの諸書の規範となつたのはキリシタン版後期国字本であつたと思われる。キリシタン版後期国字本において、語が行を跨がない操作がなされていることは、すでに鈴木広光氏によって指摘されている。鈴木氏は一六〇〇年版『どちりなきりしたん』が「語の途中で改行しないことを原則としている」とし、それ以外に改行が許されるのは、①活用語尾と助動詞の間、②複合動詞・形容動詞の形態素間、③接頭辞「御」と名詞の間、④漢語の形態素間、⑤本語の二字目と三字目の間、であることを明らかにしている。そして、そうした組版を可能としたのが、字間調整に用いられた込め物の存在であつた。キリシタン版後期国字本では活字間に適宜込め物を挿入して、単語と単語の間を分かち、可読性を向上させているのであるが、込め物を自在に用いることで、語が行を跨がない配植も実現されたのである²⁶⁾。

それだけでない。豊島正之氏は一九九九年版『ぎやどべかどる』を通じて、キリシタン版後期国字本が自立語の先頭に踊り字を用いないことを指摘しているが、こちらも嵯峨本『徒然草』などで徹底されている。ただし、この配慮は他の古活字版でもよく見られることから、嵯峨本

『徒然草』等の顕著な特色というわけにはゆかない。ただし、鈴木氏が指摘するように、嵯峨本『伊勢物語』にそれはあてはまらないことから、嵯峨の工房では必ずしも自明な配慮というわけではなかったようだ。嵯峨本『徒然草』『方丈記』『観世流謡本』、十行本『方丈記』、下村

本『平家物語』の表記に対する意識は、キリシタン版後期国字本と無縁なものであったとは思われない。

古活字版の組版技法は朝鮮活字版をもとにするというのが従来の定説であった。これに対して、大内田貞郎氏・森上修氏は活字の形状の分析などを通じて、日本と朝鮮の技法の違いを指摘し、古活字版の技法はキリシタン版に倣ったとする見解を提示している。⁽²⁸⁾そこに聊か疑問の残ることはかつて拙稿で述べたところだが、今回とりあげた五種の古活字本がキリシタン版の表記のあり方に密接にかかわる点は、この問題を考えるとき、どのように説明できるだろうか。

両者は確かに「[行]意識」をもった厳密な割り付けを行う点で共通するが、注目したいのは、それを実現するための方法に全く接点がないところである。キリシタン版後期国字本では字間に込め物を用いることにより、一行の字数調整が行われていた。それに対して、嵯峨本『徒然草』『方丈記』『観世流謡本』、十行本『方丈記』、下村本『平家物語』では、漢字・仮名の表記を操作することが最大の方法であった。そして、十行本『方丈記』、嵯峨本『徒然草』、下村本『平家物語』では、これに加えて圧縮型活字も導入された。確かに、嵯峨本『方丈記』には込め物を用いられたが、その使用は数えるほどで、これとても現場の独創によるものと思われる。

恐らく、当該の五書の開版に当たった人物は、キリシタン版後期国字本を目にし、そのレイアウトを刊本のあるべき姿として規範に仰いだのだろう。⁽³⁰⁾だが、それはあくまでも印刷された本を通じて及ぼされた影響だ。五書の刊行に携わった者たちは、キリシタン版の組版技法までは知

らなかったため、日本語の文字表記の特性に由来する独自の方法で、これに対応したものと思われる。五書とキリシタン版との関係は、このように考えれば、無理なく理解できるように思われる。

注

- (1) 川瀬一馬氏『増補古活字版之研究』上、第二編第七章第二節「嵯峨本」の刊行（A B A J、一九六七年。初版、安田文庫、一九三七年）。
- (2) 林進氏の「角倉素庵の書と嵯峨本」〔水荃〕第二十九号、二〇〇一年をはじめとする諸論考による。詳細は小秋元段「角倉素庵と『方丈記』」〔法政大学文学部紀要〕第七十七号、二〇一八年）の注（1）参照。
- (3) 小秋元段注（2）前掲論文参照。
- (4) 江島伊兵衛氏・表章氏『図説光悦謡本解説』第一章三「刊者と刊年」（有秀堂、一九七〇年）。
- (5) 小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』第二部第四章「嵯峨本『史記』の書誌的考察」（新典社、二〇一八年。初出、『法政大学文学部紀要』第四十九号、二〇〇四年）。
- (6) 川瀬一馬氏注（1）前掲書。
- (7) 川瀬一馬氏『書誌学入門』三（八）（3）「古活字版と整版の弁別」（雄松堂出版、二〇〇一年。初出、『高校通信東書国語』第二八六号、一九八八年）参照。
- (8) 高木浩明氏「嵯峨本の世界」（森洋久氏編『角倉一族とその時代』思文閣出版、二〇一五年）参照。
- (9) 今野真二氏『仮名表記論攷』第二章第一節二「書記における「行」意識」（清文堂出版、二〇〇一年。初出、『國學院雜誌』一九九五年十二月号）、「日本語の考古学」四「[行]」はいつ頃できたのか——写本の「行末」を觀察する——（岩波新書、二〇一四年）。
- (10) 鈴木広光氏『日本語活字印刷史』第二章「古活字版の仮名書体」（名古屋大学出版会、二〇一五年）。

- (11) 林進氏「角倉素庵の書跡と嵯峨本——素庵書『詩歌卷』と嵯峨本『新古今和歌集抄月詠歌卷』の成立について——」(『日本文化の諸相』風媒社、二〇〇六年)。
- (12) 鈴木広光氏注(10)前掲論文では、初期の活版印刷では写本の初期様式が活字で再現されることを世界的視野のもと、指摘している。
- (13) 鈴木広光氏注(10)前掲書第一章「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」(初出、『近世文藝』第八十四号、二〇〇六年)。
- (14) 鈴木広光氏注(10)前掲論文。
- (15) 森上修氏「調査メモ」天理図書館蔵「徒然草」(第一種本)三格活字(二〇五九駒)の印出字調査」(『ビブリア』第一四〇号、二〇一三年)。
- (16) 森上修氏注(15)前掲論文では三倍格四字連彫活字を二六種とするが、本稿ではこれに「く」を含むもの(四十四種)と、森上氏が数値に含めなかった、漢字と「、」を含むもの(三十三種)を加え、全体的に再検討を行い一八五種とした。
- (17) 鈴木広光氏注(13)前掲論文。
- (18) 鈴木広光氏注(10)前掲論文。
- (19) 川瀬一馬氏は『龍門文庫善本書目』(阪本龍門文庫、一九八二年)二六三頁において、十行本『方丈記』の活字が嵯峨本『徒然草』のものを襲用していることを指摘する。小秋元段注(2)前掲論文は、この説に対して懐疑的であると述べたが、これを訂する。
- (20) 嵯峨本『徒然草』には雲母刷文様料紙の第一種本のほか、四種の素紙本がある(高木浩明氏注(8)前掲論文参照)。これらが十行本『方丈記』↓嵯峨本(第一種本)『徒然草』↓下村本『平家物語』の刊行順のなか、どの段階で印刷されたのかは未勘である。
- (21) 鈴木広光氏注(13)前掲論文は、嵯峨本慶長十三年刊初刊本『伊勢物語』(近畿大学中央図書館蔵)において、総活字数二二三二種のなかで、一度しか使用されていない活字が三四四種(約一六%)あることを指摘している。
- (22) 鈴木広光氏注(13)前掲論文は、こうした背景に、必要になったとき、その場ですぐに追加製作できる木活字の特長があったと指摘する。
- (23) 私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会書誌学研究会「関西大学図書館所蔵 謡曲百番『浮舟』(特製本)の印出字調査」(二〇〇〇年)。
- (24) 森上修氏「嵯峨本『方丈記』のこと(上)(下)」(『日本古書通信』二〇一七年六月号・七月号)。
- (25) 鈴木広光氏(10)前掲論文。
- (26) 豊島正之氏「ぎやどべかどる 解説」(尾原悟氏「ぎやどべかどる」教文館、二〇〇一年)。
- (27) 鈴木広光氏(10)前掲論文。
- (28) 大内田貞郎氏・高部萃子氏「朝鮮古活字版に想うこと——特に活字の形状と植字版を中心に——」(『ビブリア』第八十九号、一九八七年)、大内田貞郎氏・辻本雅英氏「本館所蔵『君臣図像』の版種について」(『ビブリア』第九十三号、一九八九年)、森上修氏「慶長勅版『長恨歌琵琶行』について(下)——わが古活字版と組立式組版技法の伝来——」(『ビブリア』第九十七号、一九九一年)等。
- (29) 小秋元段注(5)前掲書第二章第七章「古活字版の淵源をめぐる諸問題——所謂キリシタン版起源説を中心に——」(初出、『国際日本学』第八号、二〇一〇年)。
- (30) 佐々木孝浩氏「キリシタン版国字本の造本について——平仮名古活字本との比較を通して——」(『斯道文庫論集』第五十一輯、二〇一七年)が、キリシタン版国字本と平仮名古活字版の造本上の共通性を指摘し、平仮名古活字版がキリシタン版国字本に「ヒントを得て目的に適した改良を加えた」と指摘するのは、この現象と揆を一にするとと思われる。

〔附記〕

図版掲載にあたりご高配賜った公益財団法人東洋文庫蔵、国立公文書館、国文学研究資料館、京都大学附属図書館に感謝申し上げます。

One Side of *Sagabon* and Its History

KOAKIMOTO Dan

Abstract

At the beginning of the early modern period, Suminokura Soan (1571-1632) published a number of works, including the beautiful collection known as *Sagabon*. Of these, *Sagabon Hôjôki*, *Tsurezuregusa*, *Kanze-ryû Utaibon*, *Jyûgyôbon Hôjôki*, and *Shimomurabon Heike monogatari* had a common layout design that did not divide phrases via line breaks, a method influenced by the layout of Jesuit printing layouts.